

6 大学図書館職員の新たな役割

千葉大学文学部教授

附属図書館ライブラリー・イノベーション・センター

竹内 比呂也

本講義においては、「電子情報環境下における大学図書館機能の再検討」（平成 16～18 年度科学研究費補助金、基盤研究(B)課題番号 16300075）および「電子情報環境下において大学の教育研究を革新する大学図書館機能の研究」（平成 19～21 年度科学研究費補助金、基盤研究(B)課題番号 19300082）（以下、二つのプロジェクトの総称として「REFORM」を用いる）の研究成果を踏まえながら、これからの大学図書館員の役割について論じる。以下は、そのための論点のである。これらには REFORM での議論に依存する点が多くあるものの、論点の設定およびその内容についての責任はすべて竹内個人に帰すものである。

1. 大学図書館はどうなっていくか

大学図書館の環境は大きく変わってきている。REFORM では、大学図書館を規定する要因として、高等教育、科学・学術、学術出版、インターネットを考え、その現状と将来をベースに大学図書館について考察したが、今日のそしてこれからの大学図書館をどのようなものととらえるべきか。大学における「教育」「研究」と大学図書館との関わりを考えた場合、学術情報へのアクセスを保証することによって実現してきた研究支援機能はますます必要とされなくなり、教育機能が重視されるようになるのではないか。

2. 大学図書館員はどうなっていくか

国立大学でも図書館は市場化テストにさらされようとしているが、そのような環境のもとでの大学図書館職員をどのように理解すべきか。またアウトソーシングは、大学図書館（員）に何をもたらそうとしているのか。もし、大学図書館の将来が教育機能にあるとしたら、アウトソーシングの先に見えてくるのはなにか。真の専門職への道か、それとも大学崩壊への道か。

3. 主題専門職的大学図書館員は万能か？

戦後日本の高等教育改革においては、アメリカがモデルとしてさまざまな変革がなされたが、大学図書館員については、それが実現してはいない。また同時に、アメリカ型の図書館員養成を理想と考える人は多い。教育機能を強化した大学図書館を考えた場合、あるいは今日のような情報通信技術に依存する図書館を考えた場合、図書館員を構成するのは、アメリカ型の専門職図書館員＝主題専門職だけでよいのか。またアメリカ型の図書館員養成／職員モデルは真にグローバル・スタンダードと言えるのだろうか。また、そもそも大学図書館員とは何ができる人であるのか。

4. パブリックサービスとテクニカルサービスという組織は今日の大学図書館にふさ

わしいのか

多くの大学図書館で、パブリックサービスとテクニカルサービスという観点から組織の構築が行われているが、これはこれからの大学図書館の役割の実現、あるいは新しい役割を担おうとしている大学図書館員を組織する形態として相応しいものと言えるのか。もし相応しくないのであれば、どのような組織形態が望ましいのか。

5. 「図書館員の変革はすなわち図書館の変革である」という意識の下で図書館（員）はどのように変わるべきであるのか

大学図書館員と教育の接点は、これまでは「情報リテラシー教育」にあったが、情報リテラシー教育はまだ必要なものであろうか。その場合図書館員は「教員」にならなくてよいのだろうか。

6. 借りものの「ラーニング・コモンズ」を超えて

教育機能の強化といえば、多くの関係者がアメリカで多く見られる「ラーニング・コモンズ」を思い浮かべるであろう。しかし、「ラーニング・コモンズ」は単なる「コモンズ」（共有地）なのだろうか。情報通信機器を配置し、アクティブ・ラーニングのための空間を整備することは「ラーニング・コモンズ」の第1歩ではあるが、それが目的なのではないはずである。そのことが本当に理解されているであろうか。「ラーニング・コモンズ」を外面だけを借りてきたものではなくするには何が必要なのか。そこで図書館職員は何をすべきなのか。

大学図書館職員の新たな役割

竹内 比呂也
(千葉大学文学部／附属図書館ライブラ
リー・イノベーション・センター)

序論

大学図書館をとりまく厳しい環境

2

大学図書館をとりまく厳しい環境

- 現在、我が国の大学図書館は、大学を取り巻く社会の高度情報化の中で、大学における教育目的の多様化と研究活動に対する社会的要請の変化と高度化に対するため、その機能を拡充し、高機能化、効率化を図る必要(どうやって！？どのような方向で！？)に迫られている。また、大学全体の管理運営費が削減される状況の中で、人件費も含めた大学図書館運営費も例外ではなく、非常に厳しい状況にある。

3

大学図書館をとりまく厳しい環境

- 『アメリカの大学では、ライブラリアン(＝主題専門職)という職種が絶滅しようとしている』⇒(図書館員は単なる書庫の門番としてしか残らない？特に専門教育における主題専門職の役割の低下？)
- 「個別の図書館システム」を必要としない、あるいは図書館を必要としないようなOPAC／図書館システム環境の出現⇒(認証のコントロールさえできれば後は利用者の思うがままに情報源を利用？)
- 「大学内で『場所としての図書館が必要である』と言っているのは図書館員くらいのものである」⇒(図書館は完全にバーチャル化？)

4

大学図書館をとりまく厳しい環境

- 「市場化テスト」の波、あるいは私立大学図書館における図書館業務全面委託化⇒(「支援」しかしない職種は大学にとって必要不可欠なものとは見なされない？)
- 「『情報化に対応しない図書館』や『学習に役立つ図書館』を明示的に指向しない大学図書館は大学にとって単なる巨大書庫という不良債権(!)になりかねない。」

→どうすれば大学図書館と大学図書館員は生き残ることができるのか？

→大学図書館員には新しい役割があるのだろうか？

5

その1:背景

「研究」から「学習」へ

6

「研究」と大学図書館

- 「電子ジャーナル」の普及は、「図書館」の可視性を著しく低下させた
 - 非来館型利用の増加
 - ILLの劇的な減少、質的变化(REFORMの成果)
 - この現象は電子ジャーナルの購入経費が確保される限りは続く(しかしこれは怪しい???同時に図書そのものの電子化はいずれやってくる。)
- ⇒ 研究に関しては、「研究成果としての学術情報の流通のマネジメント」という方向しかなくなる
- ⇒ とはいえ学術情報流通の担い手が研究者に戻りつつある?(不要になりつつあるのは出版社と図書館か??)

7

研究から「学習」へのシフト

- 大学院重視の高等教育政策から『学士課程教育の構築に向けて』(中教審答申、平成20年12月)への転換
 - 学習活動の活性化が大学にとっての喫急の課題
 - 「学士力」:課題解決能力の重視
 - 「単位制度の実質化」:事前、事後学習の重視
 - 「教育方法の改善」
 - 「初年次における教育の配慮」
 - 日本の場合、これまでこれを十分にやってこなかったもので、開拓の余地は大きい(新制大学の理念は60年経っても定着していない。例えば「単位制度の実質化」議論)

8

図書館という「場所」

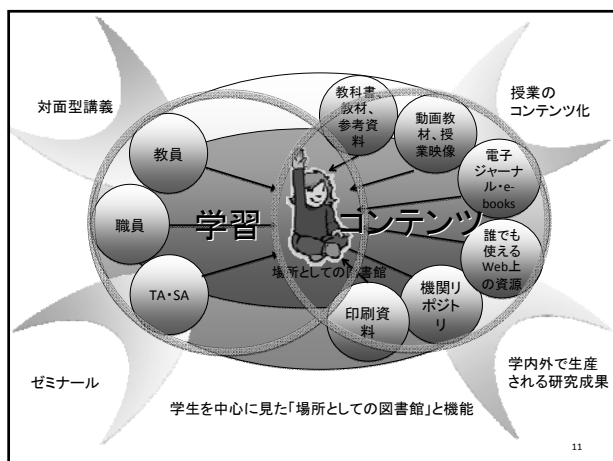
- ラーニング・コモンズ:単に情報機器が並んでさえいればいい!?
- 「図書館は蜂の巣のような場所」-- Sarah Thomas
 - 人の活動を見る。自分の活動を見せる。それによって刺激を受ける。

9

“日本型”ラーニング・コモンズは、、、

- 単なる空間の提供であるケースが目立つ
 - グループ学習室
 - コンピュータ・クラスター
 - ラウンジ、カフェなどのくつろぎ空間
- 利用者のニーズには合致しているかもしれないが、そこで働く図書館員の存在(人的支援)はほとんど何も考えられていないように見える。
- 大学全体の中で図書館機能の再定義がなされないと意味を持たない。

10



11

コンピュータ資源は集客力!?

- コンピュータ資源はいつまで集客力の源たりうるか?
 - いずれ誰もがコンピュータを持つようになると、単なる厄介者になる?
 - その時、図書館にとって何が集客力になるのか?
 - 人。資料がなくなり、建物がなくなっても、人によるサービスが他にない魅力的なものであれば、図書館員は生き残ることができる。

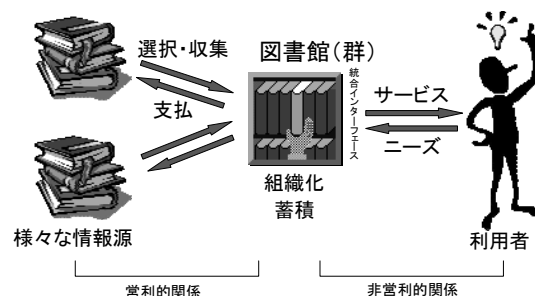
12

その2: まだまだ背景

「学習」のための図書館サービス: 回顧

13

図書館を中心とした 情報サービス理解の枠組み



14

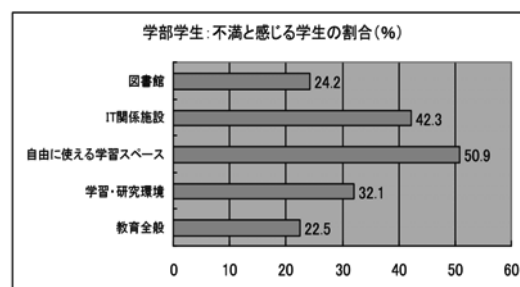
「学習」との関わりにおいてこのサービスモデル はまだ有効だろうか？

- * 今の学生は、図書館を発見しているか？
- * 今の学生は、図書館で何ができるかを知っているか？
- * 今の学生は、図書館員に質問するということを知っているか？
- * 今の学生は、図書館に満足しているか？

従来のモデルは有効であるように思われるが、新たなアプローチが必要。そもそも、このモデルにあてはまるようなサービスだけでよいのかという問題。

15

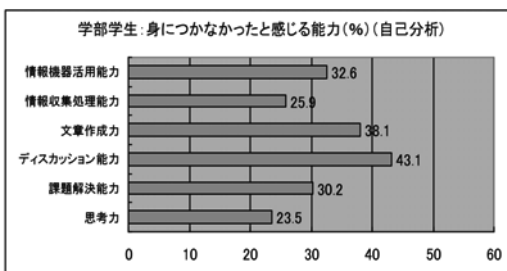
学生は満足しているか？



Source: 「千葉大学の教育・研究」に対する意識・満足度調査報告書(平成19年9月)より平成18年度卒業生調査

16

学生は在学中にスキルを身につけているか？



Source: 「千葉大学の教育・研究」に対する意識・満足度調査報告書(平成19年9月)より平成18年度卒業生調査

17

この結果から見ると

- 図書館はがんばってきたのは事実
- 図書館には不満がないと言いながら、「自由に使える学習スペース」に不満が多いのはどう考えればよいのか？
- 情報リテラシー能力の涵養という観点から見れば、「文章作成能力」「情報機器活用能力」などが今後の課題であることがわかる

18

学習をサポートする図書館

- 学習のサポートはこれまでも行われてこなかった訳ではない
 - 1960年代の岸本改革(東京大学附属図書館)
 - レファレンスルームの設置
 - リザーブ図書制度の導入

これらは成功したと言えるのだろうか？多分言えない。なぜか？

19

その3 ケーススタディ

アメリカのある大学図書館では、、、

20



21

George Mason大学の取り組み

- Johnson Center内にBeginning Libraryの設置
- Reference à la Carte™: 図書館サービスのマーケティング
- リエゾン・ライブラリアン: 教員との連携強化

22

Reference à la Carte™

- 図書館員が図書館の外に出てレファレンスサービスを行う
 - もともとブックトラックを改造
 - ラップトップコンピュータ(無線LAN接続)
 - 様々なグッズを準備
 - キャンパス・マップ
 - リエゾン・ライブラリアンの案内

23

Reference à la Carte™

- 実施状況
 - 人通りの多い時間帯をねらう(午前中の遅い時間、午後の早い時間)
 - 人通りの多い場所、バス停
 - 秋に6～8週間、春に6～8週間、夏に2～4週間
 - 大学のイベントなどの機会に

24

Reference à la Carte™

- 成果
 - 125時間の実施
 - 203件のレファレンス質問
 - 299件の“Directional questions”
 - 43件のリサーチに関するコンサルテーション
 - 教職員、学生からの非常にポジティブな反応
 - 図書館のヴィジビリティの向上に役立つ
 - 学生が感じる図書館利用上の心理的障壁をなくす

25

リエゾン・ライブラリアンの仕事

- 学生のリサーチをサポート
 - サービスデスクで
 - 事前にアポイントメントをとって
 - 電話、インスタントメッセージ、電子メールで
- リサーチプロジェクトについてのコンサルテーション
- 選書
- 利用教育

サブジェクトライブラリアンとはちょっと違う?!

26

リエゾン・ライブラリアン

- George Mason Universityの場合17名のリエゾン・ライブラリアンが存在している
- それぞれの担当領域はかなり広い
 - 数学、物理学、心理学
 - 社会科学
 - 生命科学

各学部／学科(Department)に対応

27

その4 ささやかな本論とまとめ

大学図書館員がこれから強調すべき新たな役割

28

学習サポートの方向性

- 「学生に望まれる学習サポート」はどのような方向にあるのか？→学習そのものへの関与
- 授業との密接な連携
 - 「授業資料ナビ」(千葉大学): 授業単位のバスマインダーの作成、教員と図書館の連携の基づくもの。
- 「一対多」ではなく「一対一」になるようなサービスの提供
 - 例えば、レポート執筆を支援するライティング・センター
 - これらの前提として、図書館員は匿名であってはいけないのではないか？
 - カウンターの中にとどまっていはいけない。

29

「研究」との関わり

- 「機関リポジトリ」と「研究評価、分析」が残る。
 - ⇒研究成果発信のための「機関リポジトリ」
 - ⇒研究成果評価のための「研究評価・分析」
- いずれも「図書館にしかない情報」を「図書館情報学のスキル」によって処理するもの

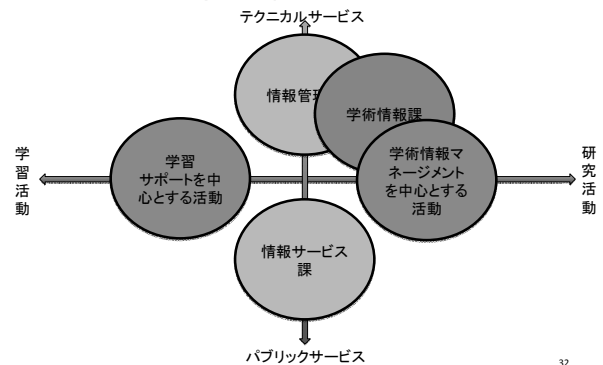
30

「資料提供／利用形態」に基づく サービス類型化からの脱却の必要性

- テクニカル・サービス／パブリック・サービスでは効率的なサービス展開は不可能
 - 利用者のタイプとニーズによる類型化しかできないだろう。
 - 研究者を対象とした業務
 - 学生を対象とした業務
 - それ以外に組織としての図書館の管理業務

31

運営組織の考え方



32

組織の形態

- 「専門職」組織は本質的にフラットでなければならない。
- 組織管理業務は本質的にフラットではできない。
- 従来大学の組織との整合性は？
 - 「専門職」部門は限りなく教員組織と近くなる

33

さて、当面の課題

- これまでやってきた業務は当面残ると考えざるを得ない(先細りとはいえ)
- 今後の発展可能性がある新しい仕事はどんどん出てきている
- マンパワーは限られている

⇒ プライオリティに基づく仕事の選別しかない

34

とりあえずのまとめ

- 図書館で行われる人的支援の中心は学生の能動的学習(あるいは学生のリサーチ)のサポートである
 - 単なる利用指導を超えて、ライティングセンター機能によるアカデミック・ライティングの指導→図書館員の教員化
 - 「ご用聞きライブラリアン」による多様な支援
 - リエゾン・ライブラリアン(教員との連携の強化)
 - 多様な人材のとりまとめ
 - 学習用コンテンツの構築＝ライセンス処理を含む

35

人的学習支援の考え方

- 大学において学習をサポートする人材は図書館員だけではない
 - 学生(TA, SA＝ピア・サポート)
 - 教員
 - 伝統的な意味での図書館員とは異なるスキルを持つ職員

多様な人材が混在することによって新しい図書館はじめて機能する

36

librarianshipのコア・コンピタンス

(ALAによる)

- 1) 専門職の基礎
- 2) 情報資源
- 3) 記録された知識と情報の組織化
- 4) (情報通信)技術についての知識とスキル
- 5) レファレンスと利用者サービス
- 6) 研究
- 7) 継続教育と生涯学習
- 8) 管理と運営

37

人材の多様性の必要性

- とはいえ、コアとしての図書館情報学の基礎知識は当然必要。
- しかしそれしかないとは多分困ることになる。
 - 多様な人材を備える必要性
 - アウトソーシングは「最低ライン」の仕事を行なうためのものであって、全面的なアウトソーシングは「大学」にとって自殺行為に等しい
 - しかし、同時にアウトソーシングしなければ、必要なサービスを提供するための人材の集約化はできないだろう

38

これからどうなる！？

- 図書館員の役割は当面広がると考えるべき
 - なぜなら、アメリカの大学図書館にくらべると、日本の大学図書館はたいしたことをしてこなかったため、新規開拓の余地があるから。その新規開拓が今日の大学にとっては重要。
- しかしながら、際限なく拡張することは不可能であり、あるターニングポイントで縮小の方向に動くことになる
 - なぜなら、図書館以外の場所で、これまで図書館がおこなってきたことの多くが実現してしまう可能性があるから。

39

これからどうなる！？

- 「全面的な図書館業務外部委託」により、短期的に経営上の問題が解決したかのように見えるが、いずれ大学全体を蝕み、大学の本質そのものを破壊する
- しかし、図書館における人材の集約化と高度化は必要であり、そのために周辺的な業務の委託は必須
- 図書館員の役割として「何を残して何を捨てるか」を見極めることができる大学(図書館)と図書館員だけが生き残ることができる

40

まとめ

- 大学図書館員が持つべき「コアとなる知識・スキル」の再定義が必要
 - 大学図書館専門職とは何ができる人の集まりか
 - それをどのような形で養成するのか
 - 大学における大学図書館員の位置づけ

41

質問、コメント、反論を
大いに歓迎します！

42